

傲慢紳士とキスの契りを

S u i & K a n a t a

綾瀬麻結

Mayu Ayase



目次

傲慢紳士とキスの契りを

書き下ろし番外編

傲慢紳士とチョコ味のキスを

傲慢紳士とキスの契りを

埼玉の工業団地の一角にある梁川工業株式会社は、プラスチック容器全般の企画、製造、そして販売を行っている。父が経営するその会社で、二十五歳の梁川翠は働いていた。二十一時を回った今も、鼻歌を歌いながら手に持ったハンディモップを動かし、陳列された自社製品の埃^{ほり}を取り除いている。

この年頃の女性なら、定時で上がつて自分の時間を楽しむ人も多いだろう。だが翠は、この会社で働くことに喜びを感じていた。

狭いながらも綺麗に整ったギャラリーをひととおり掃除し終えて、翠は手を止めた。そしてふと、窓の外へ目を向ける。そこには、街灯に照らされたハナミズキがあつた。春は花を楽しめてくれるそれは、今は赤い色に染まりつつある。

もみじ
紅葉狩りのシーズンは、もう目前だ。

わたしも休暇を取つて、のんびり箱根の温泉にでも行きたいな——なんて思つていた時、急にギャラリーのドアが開いた。

そこに立っていたのは父だった。いつもは笑みを絶やさない人なのに、今夜は様子が違う。何故か、思いつめた表情をしている。何やらただならぬ雰囲気に、自然と翠の軀^{からだ}に緊張が走つた。

「お父さん、どうしたの？　ここ、掃除し終えたら帰るんだけど」

「翠、お前……け、結婚しないか？」

父の突拍子もない言葉に、翠は持つていたハンディモップを足元へ落とした。

「えっと、お父さん？　その……何言つてるの？」

翠は呆気に取られながらも、なんとかして父の言葉を理解しようとする。だが、何度も言つてゐる意味が上手く呑み込めない。

それも当然だろう。なんの前触れもなく『結婚しないか』と言われて、すぐ受け止められる方がおかしい。

翠は、真意を測ろうと、じつと父の目を見つめる。それに気付いた父は狼狽^{ろうばい}し、ついと目を逸らした。

大学を卒業後、父の会社に入社して三年。その間、翠は男性との出会いを求めて合コンに参加することもなかつたし、女友達のように彼氏が欲しいと騒ぎもしなかつた。それがいけなかつたのだろうか。だから、翠の将来を心配している?

でも、それなら何故彼氏を作らないのかではなく、結婚しないかという話になるのか。父の考えが全くわからない。

翠は屈んで、落としたハンディモップを拾う。そして、父の横顔を窺いつつ立ち上がりつた。

「あの、お父さん? 言つてる意味がよくわからないんだけど……」

翠の言葉に、父がビクッと駆を震わせる。父はしばらくその場で棒立ちになつていてが、やがてゆっくり顔を上げて彷徨させていた目を翠に向かえた。

「こんな話はしたくないんだが……実は不況の煽りを受けて、二年ほど前からうちの経営は厳しいんだ。倒産寸前なんだよ、翠」

「えっ? な、何? ……倒産! ?」

想像すらしていなかつた父の言葉に、それ以上声が出ない。

何かの間違いだと思ったかつた。だが、窮状を訴える父の目を見ていると、翠はそれが真実なのだとわかつた。

でも何故、そんなことになつたのだろう。現状、仕事は順調なはずなのに……

翠は父に近寄り、真顔で父の目を覗き込んだ。

「どうして? 大手の化粧品会社や美容理容会社と順調に契約更新してるので」

「取引先との関係は良好だが、利益が出ていないんだ」

「そんな……だって、契約どおりにお金が支払われていれば……」

そこまで言つてからあることに気付き、翠の顔から一気に血の気が引いた。

もしかして、こうなつたのは自分のせい?

父の会社は小さく、従業員は十人もいない。それでも各方面から仕事が入つてくるので、翠は会社の状況に危機感を覚えたことは一度もなかつた。

にもかかわらず、会社は倒産の道を「二年前」からたどつていると言う。

二年前と言えば、ちょうど翠が仕事が楽しいと感じ始めたころだ。顧客に対しても最良の容器を提供したいと思うようになり、一度契約が成立したあとでも、より良いデザイン案があれば自ら率先して変更を申し出ていた。

胸を締め付けられるような苦痛に襲われ、翠は反射的にそこを手で押さえた。

の後も何度も担当者とやりとりを重ねていた。

でも父から倒産の危機を聞いて、初めて自分のやり方に問題があつたと気付いた。どうして思い至らなかつたのだろう。

元のデザインを少しでも変更すれば、容器の型取りを始めとして、本来なら必要なかった費用が発生する。それに伴い、再契約しなければならなかつたのに、翠の頭からはすっかり抜け落ちていた。

結果、会社は最初の契約のままで仕事を引き受けざるを得ない。こうしてコストがかさみ、それが積もりに積もつて赤字が増えていったのだ。

そんなこと、ビジネスの世界では常識のはずなのに……。

梁川工業が傾いた原因は、全て自分にある。なのに、父は誰のせいとは言わない。

申し訳なくて、その場で躯を縮こまらせていると、父が翠の肩を優しく抱いた。

「赤字の件は心配しなくていい。実は、うちの事情を知った取引先の企業が出資を申し出てくれたんだ。それで会社も従業員も助かる。だが、相手は完全子会社化を望んできた」

「完全、子会社？」

会社が助かると聞いてホッとしたのに、その言葉に翠の表情が強張った。

完全子会社になるなんて、それは買収にほかならない。

きっと父は、出資を申し出てくれた会社から二者択一を迫られたに違いない。出資を

拒んで倒産の道を進むか、受け入れて会社を残すか。

そして父は会社を残す方を選んだ。従業員のために、家族のために。

父がそう決めたのなら、もう何も言えない。できるのは、これからも会社のために身を粉にして働くことだけだ。

ただ、今の流れから、何故結婚話が出てきたのかわからなかつた。

翠は怪訝に思い、顔をしかめた。

「お父さんが出資を受けると決めたのなら、わたしも頑張る。でも、ひとつだけわかるしないの。出資の件と結婚話は、どう関わりがあるの？」

次の瞬間、父は口ごもつて再び俯く。だが、大きく深呼吸をすると、顔を上げて翠の目をまつすぐ見返した。

「翠にこんなこと言うなんて、父さんだってどうかしてるとわかってる。でも出資を受けると承諾したあと、思わず口から出てしまつたんだ。良かつたら、娘をご子息の嫁にしていただけないか？」

「えっ？ 娘って……わたし？ お父さんからわたしを嫁にしてくれつて頼んだの？」

もしかして、会社のために!?」

翠は、とんでもない話に目を見張つた。あり得ないと頭を振るが、父は感情も露に顔をくしやくしやにして、翠の両手を強く握る。

「翠の気持ちも考えず、こんなことになつて本当に悪いと思つてゐる。でも完全に子会社になつてしまえば、従業員を守れるかわからない。それでついこちらの身内が先方の家に入れば、うちの会社を悪いようにはしないんじやないか、少しは配慮してもらえるんじゃないかと思つてしまつたんだ」

父は悲痛な声で翠に訴える。会社を守るというのは、家族同然の従業員たちの生活を守ることを意味している。

でも、そのために、見知らぬ男性に翠を嫁がせても平気なのだろうか。いや、平気なはずがないと思いたい。だつて、父の顔はこんなにも苦しげに歪んでいるのだから。

父は翠を直視できなくなつたのか、ついと目を逸らした。

「父さんだって、馬鹿なことを言つたとわかつてゐる。でも何故か、あちらは父さんの話を一蹴するどころか、その申し出を快く受けてくれたんだ。それだけじやない。結婚する相手を知る機会が必要だといつて、一度同居してみないかと誘つてもくれた。だから父さんは有り難くその話を受け入れた」

翠は口をポカンと開け、父を呆然と見つめた。

娘に何も告げず、勝手にそんな話を進めた父の言動が理解できない。

一瞬、翠は感情を爆発させそうになつた。でも、出資の件は自分にも責任がある。だからぐっと堪えて、言葉を呑み込んだ。それでも気持ちを抑えきれず、ぶるぶると手が

いでのしがつてゐる。家族同然の従業員をこの先も守るために、翠に嫁いでほしがつてゐる。

それがわかつても、あまりに翠の気持ちを考えていらない父の言葉がショックで、静かに頭を振つた。

翠は父の手を振り払うと、ギヤラリーを飛び出した。後ろから翠の名を呼ぶ、父の悲

痛な声が聞こえる。それでも翠は、逃げるよう暗闇の中を走つた。

「お父さんが結婚してほしいと望むのはわかる。でも、こんなの突然すぎる！ 面識のない男性の家へ行つて、そこで一定期間生活しろだなんて。ねえ、本氣で言つてるの？」

「す、翠！ そ、うじやないんだ。父さんは――」

これ以上、聞きたくない！

翠は父の手を振り払うと、ギヤラリーを飛び出した。後ろから翠の名を呼ぶ、父の悲痛な声が聞こえる。それでも翠は、逃げるよう暗闇の中を走つた。

今まだ、父と冷静に話せる余裕はない。

工業団地は、既に暗闇と静寂に包まれている。ただ、道路を渡った先にある公園だけが、街灯の光でぼんやりと浮かび上がっていた。

翠は肩で息をしながら金色に染まってきた銀杏並木を横切り、誰もいない公園に入った。そこにあるベンチに座ると、長く息をつき、天を仰いでそつと目を閉じる。頬を撫でる冷たい秋風が、翠の荒ぶた心と、熱を帯びた躯を冷やしていく。

しばらく何も考えずボーッとしていたら、徐々に気持ちが落ち着いてきた。それでも、数分前の父とのやり取りが頭を占める。

「結婚を前提にした同居……」

翠はそう呟くと、ベンチの背にもたれた。沈んでは上がる不安から、目を背ける。だが、そんなことをしても、逃げ切れるはずもない。寄る辺のない不安が、翠の心の隙間からどんどん侵食してくる。

「もう、いい加減にしなさい！」

自分を叱咤して気持ちを奮い立たせる。それでも、顔の見えない男性に手首を強く掴まれ、暗い家へ引きずり込まれるイメージがどうしても消えなかつた。なんとか頭の中を真っ白にしたくて目を閉じても、すぐに父の強張った表情が瞼の裏にちらつく。懊惱を滲ませながらも、未来に希望を見いだしたいと苦渋の選択をした父の顔が。

きっと父も、今の翠と同じく胸が張り裂けるような思いを感じているのだろう。それでも父は翠に「前向きに考えてはくれないか?」と言つた。

翠はたまらず両手で目を覆い、泣きそうになる顔を隠した。

愛してもいらない人と結婚なんてしたくない。でも、自分が出資側の会社の息子と結婚すれば、多少なりとも父や従業員たちの助けになる。

そう思うと、もう自分の感情だけで結婚を嫌だとは言えない。そもそも出資を受けなければならなくなつたのは、翠が原因なのだから。

翠はそつと手を下げ、諦めに似たため息をつき空を見上げた。雲が薄くかかり、いつもなら明るく見える星さえぼやけている。まるで、自分の未来を象徴しているみたいだつた。

それでも、前を向いて歩いていかなければ。たとえ会社のために結婚することになつても、自分の人生を簡単に諦めたくない。この手で幸せを掴み取りたい。

今すぐ会社へ戻つて、父に同居してもいいと伝えよう。

翠は生唾をゴクリと呑み込んで覚悟を決める。まるで、自分の未来を象徴しているみたいだつた。

「痛つ！……な 何!?」

再び軀の位置を戻し、楽な姿勢を取つて髪に触れた。そこで初めて、ベンチのどこか

に髪が挟まっているのがわかつた。翠はあの手この手で外そつと試みるが、なかなか上手くいかない。

それどころか、動けば動くほど髪の毛が絡まり、今まで大丈夫だった体勢も辛くなつてきた。

このままでは、首や背中の筋を違えてしまうかもしれない。

辛い体勢から解放されるには、方法はひとつ。翠は、できる限り髪の先端に手を滑らせてるとそこを強く掴んだ。

「せーの！」

掛け声とともに、翠は躊躇なく強く髪を引っ張った。ブチブチと嫌な音が耳に届くが、それと引き換えに躯は自由になつた。

「良かっただ……」

翠は、全身に入っていた力をゆつくり抜いた。

ホツとしたのも束の間。静寂に包まれた公園に、いきなり乱暴に砂を蹴散らす音が響く。

「おい！ 何やつてんだよ！」

身構える前に聞こえた、男性の低い声。しかも怒氣を含んだ聲音に、翠の躯がビクンと飛び跳ねた。

「だ、誰!?」

。

声を発した人物を探すため、翠は四方八方に目をやつた。だが、街灯の光があたる場所には誰もいない。

相手を確認できないせいで、恐怖が心の中でどんどん増していく。

「どこ？ どこにいるの!?」

翠は闇雲に視線を投げる。と、公園の入り口付近の暗闇から、全身黒尽くめの背の高い男性が現れた。

「きやあああ！」

見るからに怪しい男性を見て、翠は甲高い悲鳴を上げた。早く逃げなければと思つたが、その人の瞳が街灯を反射してキラリと光るのを目についた途端、翠は恐怖で足がすべみ、その場から動けなくなつた。

男性は翠の前で立ち止まると、恐怖でおののく翠に躊躇いなく手を伸ばしてきた。そうしている間にも、大股でこちらに近づいてくるその男性との距離が五メートル、三メートルと縮まっていく。

男性は翠の前で立ち止まると、恐怖でおののく翠に躊躇いなく手を伸ばしてきた。それを避けようと咄嗟に顔を背けるが、男性は翠の髪を掴んで引っ張る。

「お前、正気か!?」

どうやら翠が髪を引きちぎるのを見ていたらしい。

翠の髪を掴んだまま男性は苛立たしげに舌打ちして、ギロリと睨む。

初対面の相手からそんな態度を取られて、翠の中にあった恐怖心が一気に吹き飛んだ。代わって、むくむくと怒りが込み上げてくる。自分の髪を掴む男性の手を乱暴に払い、キッと睨みつける。

「ちょっと！」

失礼じゃないの。見知らぬあなたにそんな風に言われる筋合いなんてない！――と言おうとしたが、彼の顔を間近で見て、言葉が喉の奥で引っ掛けてしまった。逆光で男性の顔がはつきり見えなかつた時は、ただ恐怖しか感じなかつた。でも今は、街灯に照らされたその顔がはつきり見える。

端整で男らしい顔立ち、黒々とした大きな双眸、まっすぐな鼻梁、そして意志の強そくな唇。

あまりに整つた顔に、言いたいことのひとつも言えなくなつてしまつた。そんな翠を、男性は嘲るように鼻でせせら笑う。その態度にカチンときて、彼の肩を乱暴に押して距離を取つた。

「いつたい何様のつもりなんですか!? 突然近寄つてきたと思つたら、あの暴言！わたしにだつて事情があつたんです。誰が好き好んで自分の髪を……つん！」

「ちょっと黙れ」
男性は、藪から棒に翠の口を手で覆つた。その一方的な態度に翠は目を剥き、軀を強

張らせながら身長の高い彼を見上げる。

身の危険を感じて逃げるべきなのに、彼から目を逸らせない。

いつたい彼の何が、翠をそうさせるのだろう。

一見、乱暴な振る舞いを取つてゐるようにも思えたが、実は、翠はそれほど怖さを感じていなかつた。翠が息苦しくないよう、手にくぼみを作つてくれてゐるからかもれない。

もしかして、意外と優しい一面がある?

「俺、キヤンキヤンわめく女つて嫌いなんだ。それでもくとも、お前にはいい印象を持つてないつていうのに」

やはり、優しくなんかない。しかも、何か引っ掛かる言い方をされて、翠はカチンときた。「はいい!?

翠は男性を睨みながら反論の声を上げるもの、彼の手で塞がれているせいでぐもつた音になる。それならばと、翠は彼の手に爪を立てるべく両手を上げて男性の手首に触れた。

瞬間、静電気に似たものがビリッと軀の芯を駆け抜ける。

様にギョッとした様子で乱暴に手を引いた。その仕草から、男性も同じように何かを感じたとわかった。

「男性は顔を背け、苛立たしそうに顔を歪めたが、その頬は薄らと上気している。

「何やつてんだよ、俺は。……クソッ！」

感情を押し殺したその言い方に、何故か翠の胸が締め付けられた。不可解にもときめきそうになつて、慌てて強く頭を振る。

「おい、来い！」

男性は出し抜けに翠の手首を掴み、公園の出口へ歩き出した。

「えつ？ な、何……!?」

翠が訊ねても、男性は歩みを止めない。翠が逃げないようがつちり手首を掴んだままだんどん先に進む。

男性は翠に声をかけてきた時から、ずっと傲慢な態度を取っていた。そんな言動をする見ず知らずの人物に対して、どうして警戒心を解いてしまったのだろう。離してと言いたいのに、声が喉の奥で詰まる。それならばと、翠は足を踏ん張つて躯で拒否を示すが、男性の歩みを止められない。

「や、ヤダ……やめて」

翠の口から細い声が漏れるが、男性は聞く耳を持たない。それどころか、翠を引っ

張つて歩き続け、とうとう公園を出る。

このままでは危険だと翠がパニックに陥りそうになつたところで、ようやく男性は立ち止まつた。

父のいる会社は目と鼻の先。このまま男性の手を振り払つて走れば、簡単に会社へ逃げ込める。翠の意識がそちらへ向いた瞬間、男性が手を離した。

逃げるなら今だと翠は身を翻そうとするが、男性はそれを遮つて頭に何かをかぶせた。「えつ、ちょっと!?」

頭にあるその物体を確かめようと手を上げて、それがヘルメットだとわかつた。もしかして、翠をどこかへ連れ去ろうとしている?

そう思つた途端、女性として想像もしたくない場面が頭をよぎつた。

逃げなくては！

翠が恐怖に目を見開いた瞬間、男性がいきなり翠の腰を両手で掴んで持ち上げた。

「きやあ！」
翠付いた時には、翠はそこに停めてあつたバイクに乗せられていた。

「何するのよ！ やめて！」

翠は必死でバイクの上で躯をバタバタと動かす。そのせいで車体は不安定になり、躯がバイクごと傾いた。

「い、いやー！」

倒れる！

翠は恐怖から瞼をギュッと閉じる。だが、いつまでたっても軀に衝撃は走らない。

「つたく、危ないな……」

その声にゆっくり目を開くと、男性がバイクを支えていた。何か言うべきなのかもしれないが、唇がわなないて上手く声が出せない。

そんな翠に、男性が目を向ける。

「怪我がなくて、本当に良かった」

男性の口から出た気遣わしげな言葉とその優しい声音にビックリして、翠は瞬きしながら彼の目を見つめ返した。

翠を見つめるその瞳には、翠に対しての配慮、安堵、そしてこの状況に対する戸惑いみたいなものが見え隠れしている。そこに、翠を危険に晒すような邪悪な黒い闇は一切見受けられない。

もしかして、最初から翠に危害を加える気はなかつた？

問い合わせるように目を向けるが、男性はその答えをはぐらかしたいのか、翠からついて顔を背ける。そしてそのままバイクにまたがり、エンジンをかけた。尻の下から突き上げる振動に、翠はたまらず男性の服を掴んだ。

「ねえ、どこへ行くの？ 目的はいつたい何!? お願い、ちゃんと答えてよ！」

ヘルメット越しに男性の耳に向かって大声を上げる。すると、彼はバイクスタンドを動かしながら少し顔を横に向けた。

「楽しみはあとに取つておけつて言うだろ？ しばらくふたり乗りのバイク走行を楽しめば？ そうそう、しっかり掴んでいろよ。手を離すと落っこちるからな」

男性が翠の手に触れ、その手を彼の腰に回せと指示する。慌てて拒もうとするが、その時バイクが急発進した。翠は、たまらず男性の腰に両腕を回し、振り落とされよう必死で掴んだ。

「お願い！ 理由を話してくれないのなら、今すぐ停めて！」

いくら叫んでも翠の声は風にかき消され、男性の耳には届かなかつた。

二

どれくらい時間が経つただろう。

道中、幾度となくバイクから降ろしてと懇願したが、彼は翠を解放しようとはしなかつた。それならばと自分で降りようと試みたが、そう簡単にはいかなかつた。

何しろ、バイクに乗るなんて初めてだ。彼がハンドルを切るたびに軀^{からだ}が傾き、恐怖を味わわされた。普段意識しない部分に妙な力が入ったみたいで、信号でバイクが停まつても、足が強張^{こうぱ}つて思うように動かせない。

どうしよう、逃げられない……！

せめて自分のいる場所だけでも把握しておこうと、周囲に関心を向けた。男性は意外にも明るい幹線道路を走っていた。そのため、翠は意外と落ち着いて道路標識を確認できた。

いつたい彼は、翠をどこへ連れていく気なのだろうか。

東京の練馬区に入つたところで、男性は幹線道路から逸れて閑静な住宅街へバイクを走らせる。やがてバイクは、駐車場で停まつた。

翠は、十台ほど停められる駐車場の奥に佇む二階建ての建物に目をやつた。店外の電飾は消されているが、ガラス張りの店内には小さな灯りがついている。そこに、規則的に並んだたくさんの椅子と鏡があるのが見えた。

「ここって、ヘアサロン?」

どうしてこの男性は、翠をここへ連れてきたのだろう。もしかして、翠が髪を引きちぎったのを見て、なんとかしようと思つてくれたのだろうか。

これが、彼の言つていたお楽しみ?

「ちょっと!」

小首を傾げて店に意識を向けていると、男性の手によつてバイクから降ろされた。やはり足に力が入らず、翠はふらついてしまつた。咄嗟^{とっさ}にバイクに手を伸ばし、軀を支える。だが、男性はそんな翠を助ける素振りも見せず、ひとりでさつさと店へ向かう。

翠が苛立たしげに男性の背に叫ぶと、彼は鬱陶^{うつとう}しそうな表情で振り向き、冷たい目で睨んできた。

「何?俺がエスコートしないと歩けないわけ?」

男性は不快そうにため息をつきつつも、翠のところへ引き返してきた。そして、ふたりの軀が密着するぐらいにまで近づく。あまりの近さにドキッとしたが、彼は翠の頭からヘルメットを取つただけだった。

頭が軽くなつてホッと息をついたのも束の間、翠は男性に手首を掴まれた。そして無言で店へ引っ張られる。店に着くと、男性はガラスドアを乱暴に叩いた。

店の奥から男性が現れ、翠たちの姿を見るや否や、慌ててドアの鍵を開ける。

「奏汰さん、いつたいどうしたんですか! 連絡もなしに来られるなんて。俺が店閉め

「お前がこの時間にまだ店に残つてることぐらい、長い付き合いでわかるさ。それより、ちょっと店貸してくれ」

そこで初めて、店から出てきた男性が翠を見た。まるで品定めをするかのように、まじと眺めてくる。

「あの……奏汰さん。うちをラブホ代わりに使わないで欲しいんですが」

「俺？」

「バカか、お前は！ そういう意味じゃない！」

奏汰と呼ばれた男性が、すぐさま否定する。勘違いされたのが本当に嫌なのか、彼は居心地悪そうに顔を歪める。その表情を翠に見られていると気付いた彼が、顔を背けた。

「おい、シャンプー台に来い」

奏汰に引っ張られるまま、翠はシャンプー台へ向かった。そこで乱暴に肩を押されて、椅子にしたたかに尻を打ち付ける。

「痛っ！ もう、乱暴にしないでよ。それより、どうしてわたしを……きや！」

シャンプー台の背が急に倒れ、翠は仰向けになった。抗議の声を上げかけたものの、その口をつぐむ。奏汰が、いきなりキスができそうなほど顔を近づけてきたからだ。

「キヤンキヤン騒ぐ女は嫌いだって言つただろ？ 少しは口を開じておけよ」

「なっ！」

言い返そうとしたが、奏汰にひと睨みされて真一文字に口を結んだ。翠が黙ったのを見て満足したのか、彼は前屈みになつてシャワー栓をひねり、慣れた手つきで翠の髪を

濡らし始めた。

奏汰は、手際よく水温と水流の加減を調整している。

どうやらここが奏汰の職場らしい。

だが、店員としてこの態度はどうだろう。こんな風に上から覆いかぶさるタイプのシャンプー台でシャンプーをする時、客への配慮として顔にガーゼを乗せるのが定石。にもかかわらず、彼は翠にそういう気遣いすらしない。目のやりどころに困れば困るほど、奏汰を意識してしまつて胸のドキドキが止まらなくなる。それでなくとも、迫る奏汰の躯、鼻腔をくすぐる男性的なスパイス系の香りに、翠は平静を失いそうだというのに。

しかも、奏汰の髪を洗う手つきは、その傲慢な態度とは裏腹に、紳士でどこまでも優しい。特に地肌を触る手つきがエロティックで、彼の手が耳の後ろに触れただけで翠の躯はビクンと震えた。

シャンプーをしてもらっているだけなのに、こんな反応をしてしまうなんておかしきる。これではまるで、翠が奏汰を好きみたいではないか。

奏汰には黙れと言われたが、翠は間違った感情へと流されないために、口を開いた。

「ねえ、この状況を説明してほしいんだけど。まず、あなたはいつたい誰？」

「俺？」

「俺は……伊瀬奏汰」

初めて名乗った奏汰はそこで押し黙り、その先の言葉を続けようとはしない。しかも、翠の髪を洗っていた手まで止めている。不思議に思つた翠は、目をそっと奏汰に向かた。

「……っ！」

至近距離で翠の反応を窺つてゐる奏汰と目が合い、翠は動揺を露にした。

「やつぱり、……この名前に聞き覚えはない、か」

「な、何が？」

声の震えが隠せない翠に、奏汰は呆れたようにふっと唇を綻ばせた。

「いや、知らないんなら別にいい。で、お前は？」

「わたし？ わたしは、梁川翠って言います。ところで……っあ!?」

奏汰の腕が首の下に回され、彼に強く抱きしめられる。もちろん後頭部の泡をシャワーで流しているだけなのにわかっている。なのに、すっぽり彼の腕の中に包まれると、感情の赴くまま軀の力を抜いて身を投げ出しそうになった。

相手は、翠を乱暴にバイクに乗せ、説明もせずにここへ連れてきた傲慢な男性なのに。奏汰は翠が言いかけた言葉を呑み込んでも特に気にする様子もなく、テキパキとコンディショナーまで終わらせる。そして、濡れた髪の毛をタオルで拭つて、シャンプー台の背を元通りにした。

「ほら、次はこっちに来て座つて」

カット台へと移動すると、奏汰は翠にケープをかけた。店のドアを開けてくれた男性から、カット用のハサミとクシを受け取るなり、奏汰は鏡越しに翠と目を合わせる。

「俺に任せて」

奏汰の言葉に、翠はビックリして目を見開いた。彼自身がカットするとは思わなかつたからだ。

それつてつまり……：

「ねえ。奏汰って、もしかしてヘアリスト？」

「おい、いきなり呼び捨てかよ。まあ、別にいいけど」

翠の髪に触れていた奏汰は、苦笑して肩をすくめるが、すぐにカットを始めた。

「あまり長さは変えないようにする。でも、変なところで切れてるから、全体のバランスを考えると十センチぐらいは短くなるな」

「うん、それは大丈夫。短くなるのは覚悟してたから」

髪の長さを揃えては切る奏汰の手が、不意に止まる。そして、彼は深くため息をついた。

「こんな女初めてだよ。髪が引っ掛かって身動きできないからって、普通自分の髪を引きちぎるか？ あの時、翠が何をしてるかはつきりわかつてれば、もつと早く駆けつけたのに」

こういう面を見せるから、奏汰という人がわからなくなる。だから、彼から視線を逸らせないのかもしれない。

翠は惹き付けられるまま、鏡越しに奏汰の真剣な顔、大きい手なのに器用にハサミとクシを使いこなすその手つきを眺めていた。

その後、奏汰はドライヤーで翠の髪を乾かしてから再びカットし、全体の髪型を整えた。

「毎日きちんと髪の手入れをしているんだな」

唐突にそう言うと、奏汰は翠の頭を撫でた。まるで恋人に『愛してる』と伝える愛撫のように感じてしまい、翠はどう反応すればいいのかわからなくなる。

触らないで、とか？ それとも、何事もなかつたみたいに振る舞うべきだろうか。

「翠？」

名前を呼ばれ、翠は「あ、うん」と答えるが、その声はかすかにかすれていた。

それはまるで、愛し合っている最中、感情が昂ぶった時に零れる声のようだ。そう気付いた瞬間、翠の頬は急に火照り始めた。慌てて手の甲で口元を覆つて隠すが、どうやら奏汰はそんな翠の様子に興味がないらしい。

奏汰はヘアケア商品が置かれた棚へ行き、そこからいくつかの容器を手に取る。翠は自分の反応に気付かれなかつたことにホッとしたが、彼が手にしたものを見て思わず「あっ！」と声を上げた。

「うん？ ……何？」

そう答えるものの、奏汰の声に特別に興味を惹かれたような響きはない。彼は容器からトリートメントを取り出し、手のひらで伸ばしてから、翠の後ろに戻ってきた。それを翠の髪に馴染ませては、鏡越しにヘアスタイルを整えていく。

「あのね、わたし、そのジュエルシリーズ大好きなの！」

さつきの照れはどこへやら。翠は、彼の使うヘアケア商品を饒舌に褒め始めた。

「他の会社のもいろいろ試したんだけど、やっぱりそれに戻るの。わたしの髪に一番合うっていうのかな。それに香りも大好き！ ほのかに漂うローズの香りが女子力を高めてくれそうな気がしてね」

翠は自分の一推し商品を、奏汰にアピールし続けた。

翠がそれを使用しているのは、その商品の質がいいためだ。でも実は、他にも理由があつた。その容器は、父の会社の製品であるのみならず、初めて翠が担当者にデザイン変更を申し出た商品でもあつたからだ。

翠が携わった商品を、ここへのアサロンでも扱つてくれている。たつたそれだけのことだが、翠は嬉しくて満面の笑みを浮かべた。

「ねえ、奏汰。この商品は、お客様に人気ある？」

鏡越しの奏汰に笑顔を向けるが、翠はその先を統けられなくなつた。翠と接するたび

に見せていた、あの不機嫌な表情は消え、目新しいものを見るように翠をじっと見つめにいたからだ。

ふたりは会話をせず、ただ鏡越しに見つめ合う。こつそり視線を交わす恋人同士みたいに……

「綺麗にしてもらつたね。前髪を多めに切つたから、印象が柔らかくなつた。とても可愛い」

突然割つて入つた男性の声に、奏汰との間に漂つていた甘い魔法は瞬く間に消えた。

「おい、それって俺が連れてきた女に言うセリフか?」

「どうしてですか? 可愛いって思つたんだから、それぐらい言わせてくださいよ」

男性は意味ありげにクスクス笑い、奏汰をからかう。それが気に食わないのか、奏汰はぱいと横を向いた。

「そういうところ、昔とあまり変わりませんね」

そう口にしたあとで、男性は翠がふたりの会話を興味津々で聞いていたと気付いたみたいだ。彼は翠に向かつて肩をすくめてみせる。

「奏汰さんは美容師学校で一緒だつたんです。俺の方が年上だけど、奏汰さんはそこで意気投合して以来の付き合いなんですよ。美容師学校に大学中退して入つた俺と、大学に通いながら入つた奏汰さん。ねつ、面白い組み合わせでしょ? ところで、紹介

まだでしたね。俺はこここの店長をしている中里^{なかざと}と言います。どうぞよろしくお願ひしますね」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

慌てて頭を下げつつも、翠は中里の説明に違和感を覚えた。彼の方が年上で、しかも店長だというのに、何故か奏汰に丁寧な話し方をする。傍から見ていたら、奏汰の方が立場的に上だと感じるほどだ。

二人の関係を不思議に思つていたら、店内に電話の呼び出し音が鳴り響いた。

「ちょっと失礼しますね」

男性は翠に会釈してから、ヘアサロンの受付カウンターへ行き、そこに置いてあつた携帯電話を手に取つた。

「もしもし、中里です。あつ、鈴木^{すずき}……じゃなかつたね。水嶋^{みずしま}さん、どうしたの? ……大丈夫、来週は君のために休みを取つてゐるから、必ずお宅へ伺うよ。もちろん旦那さん^{うかが}がいる時にね」

そこで中里は嬉しそうに大声で笑つた。

双子だなんて！　俺も早く赤ちゃんに会いたいよ……」

中里の話しぶりから、電話の相手は仲のいい女友達みたいだ。異性であるにもかかわらず、結婚したあともずっと交流を持ち続けているらしい。

しかも、電話の向こうの彼女はとても幸せな結婚をしているように感じられる。翠も、そんな生活を送れるだろうか。まだ名前も顔もわからない男性と……

そのまま気落ちしてしまいそうになるが、気を取り直して翠は奏汰に意識を戻した。

「最初にも言つたけど、全体の長さはほんの少し短くなつたぐらいだな。段をつけたから、以前よりもいろんなヘアスタイルにチャレンジできると思う。ヘアアイロンやホーリド力のあるワックスを使えば、パーマをかけたみたいにイメチェンできるし」

翠は奏汰に促されるまま、合わせ鏡で髪型を確認した。彼の言うとおり、多少全体の長さは短くなつたが、以前よりもよく似合つていた。しかも、中里が言つたように雰囲気が柔らかくなつて、今までより女っぽく見える。

気恥ずかしい反面、嬉しさも込み上げてきて、翠はふと頬を緩めた。

「ありがとうございます。今まで行つていたヘアサロンでカットしてもらうより気に入つたわ！ ここなら来られない距離じゃないし、今度からこつちに通わせてもらおうかな」

奏汰にまた切つてもらいたいなど期待を瞳に込めるが、何故か彼は困惑した表情を浮

かべていた。

そこでふと翠は、何も持つていらない自分の手を見た。携帯電話はポケットに入つているが、肝心の財布は会社に置きつ放しだった。カット代が払えないことに唐突に気付く。翠は慌てて椅子から立ち上がり、ケープを片付けている奏汰へ近寄つた。

「あの、ごめんなさい！ 実は今、お金が手元になくて。土曜の午後、ここに寄らせてもらつてもいいかな？ 午前中は仕事だから抜けられないけど、午後なら来られるから……」

「いや、俺は——」

奏汰は翠から顔を背けて、はつきりしない態度で言いよどむ。

もしかして、もう二度と会いたくないとか言おうとしているのだろうか。

翠はその言葉を聞きたくなくて、咄嗟に片手を上げて彼の口を覆つた。

自分らしくないその行動に、翠はハツと息を呑んだ。奏汰も驚いたのか、目を丸くしている。とんでもない振る舞いをしているとわかつっていたが、翠はその手を外そうとは思わなかつた。

奏汰の威圧的な態度の裏に隠れた紳士的な優しさを垣間見たせいか、翠が持っていた彼への印象がゆっくり変わっていく。

胸が高鳴るほど、それはいい方へ……

男性から、こんな風に優しくされるのが久しぶりだからかもしれない。

「わたし、また土曜日に来ますね」

翠は奏汰の口を覆っていた手をそつと下ろすと、まだ電話中の中里に会釈をして、店を飛び出した。

「おい、翠！」

奏汰に呼びかけられても立ち止まらず、翠は駐車場から歩道へ出た。

今財布は手元にないが、家に帰ればタクシー代を払える。通りを走るタクシーを見つけるなり、翠は手を上げて車を停めた。

「すみません、埼玉の——」

運転手に自宅の住所を告げてから、翠はやっと肩の力を抜いて息をついた。深く背にもたれ、奏汰との出会いを振り返っては笑みを浮かべる。そしてしばらくしてから、ポケットに入れていた携帯を取り出した。

マナーモードにしていたそれには、父や母、そして弟からの着信が入っていた。そんな状態で会社を飛び出し、連絡のひとつも入れていなかつたのだから、当然心配もする

だろう。

翠は、父に電話をかけた。呼び出し音が一回、二回と聞こえたところで、回線がつながる。『翠！ 今、どこにいるんだ!?』さつきは驚かせて本当に悪かった。父さんが悪かつたよ。結婚と同居の件は白紙に戻してもらうから、戻ってきてくれ。従業員たちも大事だが、翠も大切だから』

父の娘への思いを胸に刻みながら、翠は窓の外を流れるネオンの景色を眺める。

『翠？ 父さんの声、聞こえているのか?』

翠は携帯から耳を離さず静かに深呼吸し、そして手に強く力を入れた。

大丈夫。進むべき道がたとえ困難でも、いつか必ず^{まほゆ}光る未来に会える!

『お父さん。同居の件だけど、話を進めて。結婚する所したら、まずは同居して、相手の普段の性格を知るところから始めなきやね』

『いい、のか？ 本当にそれでいいのか!?』

『何言つてるの？ この話を持ち出したのはお父さんでしょ？ ……大丈夫、わたしもお父さんのように前を向くて決めたから』

『ありがとう、翠。本当にすまない』

耳に聞こえるのは、感情を昂^{あが}ぶらせた父の震える声。今すぐでも男泣きしてしまいそうな父の心を軽くするために、翠はなるべく明るく振る舞った。

「そうだ！わたし、今、会社から離れたところにいるんだけど、これから家に帰るね。だから、この続きを家で話してもいいかな？」

父の『ああ、わかつた。気を付けて帰つておいで』という言葉を聞いてから通話を切つた。これでもう後戻りはできない。覚悟を決めたからには、自分のために幸せを掴み取らなければ。

ふと、翠の手が奏汰に切つてもらつた髪に伸びた。

そこに触れた途端、心臓にチクリと痛みが走り、翠は無意識のうちに顔をしかめる。

何？ この痛み……。

なんとかしてその刺すような痛みを拭おうとするが、なかなか治まらない。

翠は戸惑いを覚えながらも、その痛みの理由から目を逸らすように瞼をギュッと閉じた。

三

奏汰との約束の土曜日。

午前中の仕事を終えた翠は奏汰に早く会いたくて、昼食もとらず電車に乗つていた。

奏汰にカットしてもらつてからまだ三日しか経っていないのに、どうしてこんなにも彼に会いたいのだろう。

あの日の夜、父に同居の話を進めてほしいと伝えてから、それはとんとん拍子に進み、明日の日曜日にはもう相手の家へ行くことが決まつっていた。

本当なら、翠の心を占める人物は、明日会う未来の夫であるべきなのに、今はこれら会う奏汰に取つて代わられている。

翠はふたりの男性に対する気持ちの差に戸惑い、何度も小さなため息を零した。

だが、そうやつて考えていても答えなんて出るはずもない。それならば、今一番会いたい人に会おう。結婚相手には、明日になれば否が応でも会うのだから。

力強く頷いて気分を変えると、翠はヘアサロンへ続く道を意気揚々と歩き始めた。

今日は晴天に恵まれて、空は青く澄み渡つている。ポカポカした陽気に、思わず鼻歌が出てしまいそうだった。そんな調子で歩いていたら、あつという間に目的地の近くに着いていた。

あそこに、奏汰がいる！

翠はもうすぐ奏汰と会えると思いつ、頬を緩めながら、まっすぐヘアサロンの入り口に向かつた。

そこの駐車場は満車で、忙しい時間帯に来てしまつたとすぐにわかつた。もう少し時

間をはずらせば良かったと思うが、少しでも早く奏汰に会いたかったのだから仕方ない。

働く奏汰の姿を探して、翠は外から店内を覗き込んだ。

そこには、順番を待つ客、ヘアリストと話をする客、そしてパーマの待ち時間に雑誌を見る客がひしめき合っている。なのに、翠はいつも簡単に奏汰の姿を見つけることができた。彼は翠にしたのと同じように、客の髪に触れてスタイリングしている。楽しそうに女性客と話してはいたずらっぽく笑う奏汰を見て、翠の胸に不愉快な熱が生まれた。それは、身を焦がす勢いで転車を駆け巡る。

「何これ……」

胸元を掴んで、どんどん増す痛みから逃れようとした時、ヘアサロンのガラス扉が開いた。

「いらっしゃいませ。ご予約はされますか？」

受付担当らしき女性が、笑顔で話しかけてくる。

「いえ、あの……」

客ではないと頭を振る翠に、彼女はきよとんとして小首を傾げる。

「わ、わたしがこちらに伺つたのは——」

「あれ？ この間、奏汰さんが連れてきた子だ」

店長の中里が翠を見るなり目をまん丸にし、傍へ近寄ってきた。

「どうしたの？ 何か忘れ物してた？ ……あれ？ もしかして、奏汰さんに用事？」

「あ、はい」

翠がそう答えると、中里は訳知り顔でニヤツとし、手で口元を覆つて笑う。

「なるほどね。そつか、だから奏汰さんはひょっこりと……ってそれは、まあいいか。おいで、奏汰さんを呼んであげるから」

「ありがとうございます」

傍にいた受付の女性に会釈してから、翠は中里の後ろをついて行つた。

中里は歩みを止めずまっすぐ奏汰に近寄つていくが、さすがに堂々とその先のフロアまで入つていくのは躊躇ためらわれ、翠は受付カウンターの前で立ち止まつた。

中里は、女性客の髪に触れ、顔を寄せ、談笑している奏汰の肩を軽く叩き、そつと耳打ちした。

すると奏汰が勢いよく振り向き、翠を見つめた。ドキッとしてしまうほど、その眼差しは強い。そんな目を向けられるだけで、金縛りに遭つたように身動きできなくなる。

でもその時、翠の心に芽生えたのは、このまま奏汰に走り寄つて、強く抱きしめられたいという感情だった。

予兆もなく湧き起つた思いに戸惑い、翠は咄嗟とつさに奏汰から顔を背ける。だが、すぐには翠の視界に彼の足が入つた。ふたりの間の距離が五十センチほどに縮まる。そこで立

ち止まるかと思ったのに、彼はさらに近づき、からだが触れ合いそうになつたところでようやく動きを止めた。

ねいこう鼻腔をくすぐる奏汰のピリッとした男性的な香り、肌から発せられる体温。男性の色

香に圧倒され、くらくらしてしまいそうになつた翠の二の腕を、奏汰がいきなり掴む。ピックリして顔を上げると、翠をじっと見下ろす奏汰と目が合つた。

「まず先に言つておく。カット代なら受け取らないから」

その言葉で、翠はここへ来た本来の目的を思い出した。慌ててショルダーバッグから封筒を取り出しが、奏汰は呆れた表情で大きくため息をつく。

「あのさ、俺の話を聞いてた？ カット代は受け取らないって言つてるんだよ」

「それならお礼として受け取つて。奏汰にカットしてもらって、本当に嬉しかつたから」翠は封筒を奏汰の前に差し出しが、彼は頑なに受け取ろうとしない。それならと彼の手に封筒を押し付けようとすると、彼は両手を背に隠してしまつた。

だからといって、翠がここで引くわけにはいかない。

「どうして受け取つてくれないの？ カット代でなければ受け取れるでしょ」

「だから、いらないって言つてるだろ」

奏汰の声が少し大きくなる。それに負けてはいられないとばかりに、翠の声も徐々に甲高くなってきた。

「翠に、……できること？」

「これはカット代じゃないって言つてるのに、どうしてわかつてくれないの？ これは純粹な気持ち、お礼の気持ちなの。それならも受け取つてくれないなんて！」

「金に礼を込められても、俺は嬉しくはないね」

「じゃ、何をしてほしいの？ 何をすれば嬉しく思つてくれる？ わたしにできることを言つて！」

「翠に、……できること？」

翠にそう言われるとは思つていなかつたのだろう。明らかに不意をつかれたと言わんばかりに、奏汰の声のトーンが下がる。

何か変なことを言つただろうか。小首を傾げそうになつた時、突然誰かに肩を触られて、翠は飛び上がるほどピックリした。

彼は奏汰の肩も掴み、ふたりに顔を寄せてくる。

「あのね、はつきり言つて営業妨害、邪魔。大声でやり合うんなら、外でしてくれるかな？」

笑顔だが、目は笑つていない。

その迫力に気圧され、翠と奏汰が何も言い返せないと、中里の手で店外へ放り出されてしまった。

「それじゃ、さよなら」

戻ってくるなどはつきり示すためか、中里はふたりの前でガラスドアをびしゃりと閉めた。

呆然と立ち尽くす翠と奏汰。しかし、この状況を把握するので頭がいっぱいだつた翠よりも、奏汰の方がいち早く我に返つた。

「つたく、なんなんだよ、あいつは」

奏汰はため息をつき、呆れたように頭を振つた。だが、その頬は薄らピンク色に染まつ

てゐる。

もしかして、彼は自分でもあんなに頑固になるなんて思つていなかつた？ それで今になつて恥ずかしく思つてる？

誰に言つてもなくボソッと呟いた奏汰は、駐車場へ歩き出す。そこには、奏汰と出会つた夜、翠を無理やりこのヘアサロンへ連れてきた時に乗つていたあのバイクがあつた。

奏汰はバイクに跨るとエンジンをかけ、ミラーに引っ掛けっていたヘルメットを取つて

かぶる。奏汰の行動を見ていた翠だつたが、ふと我に返り、慌てて彼に駆け寄つた。

そんな奏汰の行動を見ていた翠だつたが、ふと我に返り、慌てて彼に駆け寄つた。

「ま、待つて！」

翠は、ハンドルを握つた奏汰の手に触れる。

「このまま帰っちゃうの？ 仕事は？ 中里さんに怒られたからつて、仕事を放つたら

かしにして帰つたらダメよ！」

「はあ？ 何言つてるんだよ。俺、別にここで働いてないし」

「……え？」

思いもかけなかつたその言葉に、翠の口がポカンと開く。

「どうして……ここで働いていないの？」

「そんなの決まつてるだろ。俺は別の仕事に就いてるからだ」

「別の、仕事？」

翠にはさっぱり奏汰の言葉が理解できなかつた。

混乱を隠せず視線をさまよわせる翠を見ていたのか、奏汰がクスッと笑みを零す。その声に引き寄せられて顔を上げた時、奏汰が翠の手に触れた。

「何？ そんなに俺のことが知りたい？ だったらこのあの時間、俺に付き合つてみる？」

「このあの、時間？」

奏汰は翠とデートしたいと言つてゐるのだろうか。手を握られているせいでテンパつ

てしまい、頭が上手く回転しない。何をどう言つていいのかわからず口ごもつていると、翠がまだ手にしていた白い封筒を指し、思わずぶりにニヤリとした。

「俺に付き合えば、それを受け取つてもいいよ。そういう大義名分がないと、翠が動けないんならね」

何かの後押しで動けない奴なんだろ、そう言われて少しムツとする。でも、奏汰の表情を見てその気持ちは一瞬で吹き飛んだ。

こんな風にリラックスした彼を見るのは初めてだつたからだ。無邪気に翠をからかい、それを楽しむ彼の表情がこんなにも素敵だなんて……

奏汰に見入つてゐる翠に、彼はこれ以上何を言つても無駄だと思ったのだろう。

奏汰はバイクから降りるなり、バイクのメットインスペースから予備のヘルメットを取り出し、初めて会つた時と同じように翠の頭にかぶせた。

「えつ？ わたし……まだ行くって言つてない！」

拒絶するのに、いとも簡単に奏汰の手に捕まつてしまふ。そして促されるまま、バイクに乗る彼に続いてその後ろに座つてしまつた。

「じゃ、行くぞ。しつかり掴まつてろよ」

翠は手に持つてゐた封筒をバッグに入れると、あの夜と同じように、彼の腰にためらいがちに両腕を回す。それを確認してから、奏汰がバイクを発進させた。

「ねえ、どこへ行くの？ ……奏汰つてば！」

当然ながら翠の声は、バイクの音と風でかき消される。いろいろ言いたいことはあるのに、ゲイゲイ引つ張られるともう何も言えなかつた。翠は奏汰の腰に回した手に力を込め、そつと彼の背中に寄りかかつた。

それから約二時間後。バイクがたどり着いた先は、お台場だつた。駐車場にバイクを置き、迷わず商業施設へ向かう奏汰に訊ねる。

「ねえ、買い物がしたいの？」

「いや、別に。ただグラグラしたいだけ」

奏汰の要領を得ない答えに、翠は力なく頭を振つた。

それだけなら、別にお台場まで来なくても良かつたのに……

何も話さうとしない奏汰の横で唇を尖らせていると、いきなり彼が翠の肩を抱いてきた。

「何か軽く食べてから動こう。俺、昼飯食べてないんだ」

奏汰は氣さくに話しかけ、なんでもないことのように翠に触れる。でも翠にしてみれば、心臓がバクバクして肩の力を抜くどころではなかつた。

どうして奏汰に対しても、まるで無垢な少女みたいに心が震えてしまうのだろう。

その答えを探すために、翠はそっと彼の横顔を振り仰ぐが、そこに答えがあるはずもない。

自分の気持ちなのによくわからないそのもどかしさから、翠が小さくため息をついた時、奏汰が目の前のレストランを指した。

「あそこに入ろう」

奏汰の様になるエスコートを受けて、翠はイタリアンレストランに入った。

何を注文しようかとメニューを見ながら悩んでいると、ふと周囲から視線を感じ、翠は顔を上げた。

そこで初めて、奏汰がレストランにいる女性客の眼差しを一身に浴びていることに気付いた。興味津々な目もあれば、頬を染めてちらちらと彼を見ている女性もいる。その反応に影響され、翠も改めて彼を観察した。

初めて奏汰を見た時も思ったが、その精悍な顔立ちは、まるでモデルや俳優のようだ。少し俯き加減になつて何かを真剣に見る目の妙に艶っぽいし、堅く結ばれた口元には意志の強さが垣間見える。喉仮が動くたびに、ドキッとしてしまう男の色気も持ち合わせている。しかも、奏汰はすらっとして身長も高いし、体躯も引き締まっている。女性が目を奪われないはずがない。

奏汰って、こんなにかつこいいんだ……

翠はふと、メニューを持つ彼の手に視線を落とした。

その瞬間、翠の心臓がドキドキし始めた。

奏汰の骨ばった大きな手は一見不器用そうに見えるが、とても器用に優しく動く。その手がどんな風に動き、触れ、翠の心を震わせたのかを思い出してしまい、急に軀がうずうずしてくる。

でも、すぐに翠の表情が強張った。翠の髪や頭に優しく触れたように、他の女性にもそうするかもしれないと思つただけで、奏汰が美女を抱くベッドシーンが脳裏に浮かんだからだ。

その光景を振り払おうとして、翠は瞼をギュッと閉じる。でも、その生々しい光景は頭から消えてはくれない。それどころかどんどん鮮明になつていく。

胸に針で刺されたような痛みが走り、翠は思わず唇を強く引き結んだ。

何、この気持ち。どうして奏汰が他の女性を愛するシーンを想像しただけで、心が悲鳴を上げるのだろう。これではまるで、奏汰に恋をしているみたいだ。

そう思つた途端、翠の心臓の鼓動が速くなる。

奏汰に……恋!?

想像すらしていなかつた考えに衝撃を受け、翠の手足がぶるぶる震え出した。その震えを抑える努力をするが、それは一向に止まらない。

想像すらしていなかつた考えに衝撃を受け、翠の手足がぶるぶる震え出した。その震

翠はウエイターが置いてくれたレモン水を飲んで、気持ちを落ち着かせようとする。

「あつ！」

水が、翠の膝めがけて零れ落ちる。慌てて椅子を蹴って立ち上がるが間に合わず、ジーンズが濡れてしまった。

「翠、何やつてるんだよ」

あからさまに呆れた表情を浮かべながらも、奏汰は席を立つて翠の傍に来た。ポケットからハンカチを取り出して跪き、翠の濡れたジーンズを拭い始める。

「ご、ごめんなさい！」

奏汰のごつごつした大きな手が美女の肌を愛撫する光景を想像したせいか、翠は奏汰の手つきに顔が真っ赤になつた。

「つたく、そそつかしいなんて聞いてないぞ」

文句を言いつつも、親身になつてくれる奏汰。恥ずかしい気持ちもあるのに、その紳士的な態度に、翠はうつとりと彼に見入つてしまつた。

「大丈夫ですか！」

布巾を手にしたウエイターの声で、翠はハッと我に返る。

「あつ、はい！」

そう返事をする声が上擦うわざってしまう。それでもなんとか笑顔を作り、ウエイターにテーブルを汚してしまったお詫びと、片付けに対する礼を言つた。

「礼を言つてほしいのは、俺の方なんんですけど」

奏汰が嫌みつたらしく言つて、翠を睨む。だが、羞恥しゆうちで頬を染める翠を見て氣分が変わつたのか、彼はゆっくり立ち上がり、ウエイターへ視線を向けた。

「すみません。せつかくテーブルをセットしてもらつたんですけど、店を出ます。彼女、服が濡れて気持ち悪がつてゐるから」と、翠の手を掴んで店をあとにした。

「どうぞ気になさらないでください。それよりも、どうぞ連れさまの方を――」

氣遣つてくれるウエイターに、奏汰が頭を下げる。そして、翠のバッグを椅子から取ると、翠の手を掴んで店をあとにした。

「ねえ、どこへ行くの？ 化粧室なら、あそこ！」

化粧室が記された案内板を指すが、奏汰はそちらへ行こうとはしない。

「ねえ、奏汰つてば」

「今日は俺に付き合つてくれるんだろ？ だから、翠は何も心配しなくていい」

少し機嫌が直つたのか、肩越しに翠を見る奏汰は、楽しそうに笑つていた。

そんな顔をされると、また翠の心臓が激しく高鳴り始める。その音が大きくなるにつれて周囲の音が搔き消えていき、翠の目には奏汰しか映らなくなる。

こんなに優しくしてくれるなんて、もしかして翠に對する心証が変わったのだろうか。そう思つてしまふほど、翠を見る奏汰の目は、初めて会つたあの日とは違う。

「ねえ、そうなの？」少しはわたしを氣にしてくれているの？——素直に言えない言葉を心の中で囁きながら、翠は奏汰を見つめ続けた。

力強く翠の手を引つ張る、奏汰の広い背中、そして彼の端整な横顔を……。
それから数分後。

エスカレーターで階を移動して向かつた先は、婦人服の店が並ぶフロアだつた。奏汰は最初からどこへ行くか決めていたみたいで、よそ見など一切せず、堂々とした態度でひとつのブティックに入る。

二十代の女性店員が笑顔で出迎えてくれたが、その表情は奏汰の顔を見て一変した。「まあ、伊瀬さま！」本日のご用件はなんでしょうか？ 実は、店長はただいま不在でして……」

店員は明らかに狼狽^{ろうぱい}している。しかも、それを隠せないまま奏汰に話しかけている。翠はそのふたりを觀察するよう、交互に見比べた。奏汰は、婦人服を扱うブティックの店員に名前を覚えられている。それはつまり、この店をよく利用する常連客のひとりということだ。

もしかして、恋人と連れ立つて買い物に来ているのかもしれないと思つた途端、翠の

胸に不愉快なものが湧き起つた。

いつたい自分はどうしてしまつたのだろう。こんな気持ちになる原因がわかれれば、苦しい思いをしなくともすむのに。

翠は瞼^{まぶた}を閉じ、見知らぬ誰かに対する汚い感情を心の奥底へ抑え込もうとして俯いた。「別に店長に用事じゃないから。今日は仕事とは無関係、彼女の服を買いにきたんだ」

思いがけず聞こえた奏汰の言葉に翠は息を呑み、問うように彼を見上げる。

「仕事とは無関係つて……えつ？」

翠は小さな声で囁くが、奏汰の意識は既にハンガーにかけられた婦人服に移つていて、その返事を聞けなかつた。

ひとり残された翠は、手持ちぶさたで、ふとマネキンに着せられたワンピースの値札を見た。

「嘘……、こんなにするの!?」

普段なら到底手を出さない、いや、出せない値段に、一気に翠の顔から血の気が引く。

こんなに高い服は買えないし、買ったとしても気安く着られない。

早く断らなければと思うものの、奏汰は女性店員とあれやこれやと話しているので、なかなか声をかけられなかつた。

奏汰は時々店の入り口でおろおろしている翠に目をやるが、それは単に手にした服が

翠に似合うかどうかを確認しているだけのようで、すぐ女性店員との話に戻る。

翠は、奏汰たちから視線をついと逸らした。

このまま店から出てしまおうか。もう少しリーズナブルな店へ行けば、手持ちで買えるはずだ。その方が断然いいと思い、翠は身を翻した。だが、一步踏み出そうとしたところで、奏汰に手首をがちり掴まれる。

「何してるんだよ、さつきから呼んでるのに。ほら、早くフィットイングルームへ行ってこい」

顎で指した先で店員が服を持ち、翠が来るのを待っている。

「ねえ、わたしには買えない。だって高いもの」

翠は青ざめた顔で頭を振り、小声で奏汰に伝えた。すると、彼は不快そうに顔を歪める。「あのさ、俺が女に払わせると本気で思つてるわけ？ 金の心配はしなくていいから、早く行けって」

翠は強引に奏汰に引っ張られ、そして背を押された。

「さあ、どうぞ入ってください」

目の前でにこやかに微笑む女性店員、後ろには仁王立ちして一步も引かない様子の奏汰。

もう前に進むしかない。

翠は背中に痛いほどの視線を受けながら、しぶしぶ靴を脱ぎ、広いフィットイングルームに入った。

「服はこちらの棚に置きますね。濡れたものは、この紙袋へ入れてください」

店員は笑顔で告げると、フィットティングルームから出ていった。

正直、着替えたくない。でも、濡れた服をいつまでも着ていたくなかった。

翠は覚悟を決めると服を脱ぎ、用意してくれた紙袋へそれらを入れる。それからキャミソール、七分袖のシフォンのワンピース、カーディガンを着た。

「着替え、終わりましたか？」

カーテンの傍から聞こえた女性店員の声に、翠は「はい！」と答えた。直後「失礼しますね」という声に続いてカーテンが開き、彼女が入ってきた。

「わあ、とても素敵です！ これじゃ、伊瀬さまも大変かも」

楽しそうにクスクス笑う女性店員の声を聞いても、姿見に映る翠の表情は強張つていた。

彼女の言うとおり、そのワンピースは翠に似合っていて、今着ていたものより女らしく見える。でも、翠を飾ってくれたそれらの合計金額を思うと気が引けて、素直に受け答えできなかつた。

翠は顔を引き攣らせたままフィットイングルームを出て、奏汰の姿を探す。彼はぶら

ぶらとディスプレイされた服を見ていたが、翠の視線に気付いたのかおもむろに顔を上げた。

奏汰は翠を見て目を見開いたあと、すぐに満足そうに頬を緩めた。

「とても似合ってる。よし、全てもらおう」

「伊瀬さま、ありがとうございます！」

会計を済ませた奏汰はメモ用紙に何かを書き、それを女性店員に渡してフィットイングルームを指した。何をしているのかと思ったが、彼は翠に近づき、何も言わず手を握る。

「さあ、行こう」

店員の「ありがとうございました」という声に翠は一度振り返ったが、すぐに奏汰を見上げた。

やつぱり今日の奏汰の態度はおかしい。

今まで、手首を掴んで引っ張られたことは何度もあった。でも、こうやって彼から手をつないできたら、ふたりは親密な関係だと勘違いしてしまいそうになる。

ねえ、これはどういう意味？ 奏汰の気持ちを聞かせてよ——そう言えたらどんなにいいだろう。

素直に訊けない自分の感情を持て余しながら、翠は彼と一緒に階へ向かった。

今度こそ軽食をとるためオープンテラスのあるカフェに入り、クラブハウスサンドウ

イッチと飲み物を注文する。そしてふたりで、たわいもない話をしながら食事をした。お腹が満たされると、翠はオレンジジュースを飲み、椅子の背にもたれて奏汰に目をやる。

「奏汰。あの……服の代金は絶対返すから」

奏汰は、答えるのも面倒だと言わんばかりに片眉を上げる。それでも翠が絶対返すと言い募ると、彼は大儀そうに大きくため息をついた。

「俺が買ってやつたんだから気にするなって。そもそも男が女に服をプレゼントするのには、意味があるんだよ」

「えつ？ 意味って何？」

きよとんとして訊き返すと、奏汰が信じられないと言いたげに目を剥く。

「もしかして、そういう男と今まで付き合つてこなかつたのか？」

「どうもすみませんね！ 過去に付き合つた彼氏に服をプレゼントしてもらったことは、

一度もありません」

翠は、たまらず唇を尖らせて拗ねる。

とが

「なるほどね。まあ、それはそれで……なんというか、正直心が軽くなるか」

「何言つててのか、全くわからないんですけど」

ジロリと睨む翠に、奏汰はどうとう苦笑いした。

「あのさ、男が女に服をプレゼントする時は、男なりにそこに含みを持たせてるわけ……」
奏汰はしばらく何か考え込むように黙っていたが、急にニヤリとして降参だとばかりに両手を上げた。

「駆け引きはもうやめた。正直に話すよ。男が服を贈る理由、それは……その服を脱がす権利をくださいねって意味」

「えつ？ 服を、脱がす権利!?」

翠は、奏汰の言葉に度肝を抜かれた。

女性の服を男性が脱がせてすることといったら、ひとつしかない。

奏汰が翠の素肌に優しく触れ、そのあとを彼の唇がたどる生々しい光景が脳裏に浮かんだ。意識すればするほど、彼の唇が肌を愛撫し、感じてしまふ自分の姿が頭から消えない。顔を隠すよう手の甲を口元にあてるが、もうダメだった。

翠は羞恥(しゅうち)で頬を真っ赤になると、テーブルに手をついて乱暴に席を立つ。

「……！」

翠は奏汰に背を向け、何も言わずテラスから飛び出した。

「信じられない、信じられない！」

翠は、人目も気にせず何度も独り言を呟いた。勢いのまま道路を横切るが、海岸へ入る直前で足を止める。そして、肩で息をしながら、翠はそっと振り返った。

「もう！」
翠は靴とソックスを脱ぐと、足の指の間に入り込む砂の感触を楽しみながら砂浜の上を歩き出した。
何故こんなにも奏汰を気にしてしまうのか、その理由を改めて考えようとする。
頭をよぎるのは、奏汰の傲慢な態度の裏にある紳士的な優しさだった。言動は乱暴に感じるのに、それを全て取つ払つてしまうほどの温かさが彼にはある。

翠の髪をカットしてくれたことや、濡れた服を着替えたいと翠が言わなくとも気持ちを悟ってくれたことがそうだ。

もちろん、さつきの奏汰の話から、そこに下心があったのはわかつた。当然、はめられた感は否(ひ)めない。でも正直に口にしてくれた奏汰に、翠は好感を持った。そして、そんな彼に女性として自分を好きになつてほしいとさえ思つてゐる。

その瞬間、翠は音を立てて息を吸い込んだ。

好きになつてほしいって、もしかして……奏汰に恋してる?

翠は自分の気持ちを確かめるために、もう一度奏汰のいるカフェへ目を向いた。だが

そこに彼はいなかつた。奏汰はここから十メートルほど離れた場所に立ち、ポケットに手を突っ込んだまま翠を見守るようにじっとこちらを見つめている。

風の音、子どものはしゃぐ声、そして浜辺に打ち寄せる波の音がどんどん遠ざかっていく。翠が感じるのは、奏汰の強い眼差しと、それに合わせて高鳴る鼓動だけ。

ブルッと震えたのは海から吹く風のせいだけではない、胸の奥からあふれる奏汰への想いが、息苦しいほどに高まってきたからだ。

ああ、わたしはこんなにも奏汰に恋をしてる！——自分の気持ちに気付いた翠は、想いを目に宿したまま奏汰を見つめ返した。

奏汰は翠と目を合わせるなり、ふと笑って少し伏し目がちになる。しばらくその場で立ち尽くしていたが、やがて彼はゆっくり顔を上げて、翠の方へ歩き出した。奏汰の顔がどんどん鮮明になる。翠だけを見つめていることがわかるほど近くへ、彼が寄ってきた。

「翠？」

奏汰が、気遣わしげに翠の名前を呼ぶ。それでも翠は、彼をただ見つめ返すことしかできなかつた。

どうして今になつて好きな人ができるんだろう。もっと早く奏汰と出会つていれば、この恋を成就させるために頑張れたかもしれないのに。

そう思つても、もう未来は変えられない。明日、翠は結婚するかもしない人と同居をスタートさせる。恋をしていられるのは、今しかない。

翠は一度唇を引き結んで目を伏せるが、すぐににっこり微笑んだ。だが、翠の態度の変化が解せないのか、奏汰は眉間に皺を刻んでじっと翠の目を覗き込んでくる。

奏汰の意味深な眼差しに気付かない振りをして、翠は顔を背けた。

「ねえ、座らない？」

翠は、奏汰の腕を引っ張つて波打ち際から少し離れた場所へ移動すると、そこに腰を下ろした。目と耳で景色を楽しむためじっと海を眺める。

奏汰とは、あと数時間ほどしか一緒に過ごせない。だからこそ、素直な気持ちで彼といろいろな話をしたい。

翠は、隣に座る奏汰にゆっくり視線を移す。

「ねえ、奏汰。今日はわたしを誘つてくれてありがとう」

「なんだよ、急におらしくなつて」

翠の中に足を潜らせてはそれが足をくすぐる感触を楽しみながら、翠は奏汰の言葉に三年振りかな。大学を卒業してからずっと仕事が楽しくて、男つ氣はさっぱりだつたか

立ち読みサンプルはここまで